
灯台と髪飾り

kotorinakisekai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灯台と髪飾り

【Nコード】

N3943Q

【作者名】

k o t o r i n a k i s e k a i

【あらすじ】

灯台に少女と少年がいた。少女の方は微笑み、少年の方は混乱していた。

少女は美しい髪飾りを付けてきていたのだ。オシャレなんて馬鹿馬鹿しいと吐き捨てていた少女……。少年はそこが気に入っていたのに……。

【この作品は他サイトと二重投稿しています】

灯台の最上階に、少年と少女の二人が居た。二人はここで出会い、ここで友情をはぐくんだ。少なくとも、少年はそう信じていた。

しかし、少年はこの日少女に戸惑っていた。少女が美しい髪飾りをつけて、ほんのりと化粧をしているのである。少女は前からおしやれには興味がないと言っていた。少年は少女のそこが気に入っていたのだ。もちろん性格が合ったということもあるのだが。

「何にも言ってくれないのね」

少年は今日少女に合ってからずっと沈黙していた。それに痺れを切らして少女が少年に話しかけてくる。

「驚いたよ。髪飾りを付けてきたのは初めてだろう？」

「ええ、姉に頼んで私に似合う物を選んでもらったの」

少年はますます混乱した。少女は自分の姉のことを嫌っていたはずだ。たかが綺麗なだけの石にあれば金をかけるのが理解できない。それが少女の口癖だったはずだ。

「……そういうの嫌いじゃなかったっけ？ お姉さんのことも悪く言っていただろう？ そこまでして男の気を引きたいのかって……」

少年は我慢できず少女にそう尋ねてしまった。

「今まで私が姉を馬鹿にしていたのは、姉の気持ちが理解できなかっただけ。私が着飾ったりしなかったのは、それを見せたいと思う人が今までいなかっただけの話よ。でも今なら理解できる。自分のことをよく見てもらいたいと思ったのは初めてよ」

少女の答えはよどみなかった。

少年が少女に初めて会った時はどんな感じだったろう？ 少年には少女の目は世の中を見下しているように見えて、とても孤独に感じられた。その後思わず声をかけた時には、かなり冷たい言葉をか

けられた気がする。

何度か会っているうちにまともに会話してもらえるようになったが、少女の話はいつも悲観的だった。そして少年はそこが気に入っていた。

『人間ってくだらないわね。皆他人の顔をうかがってばかり。自分の意見ってものがないのかしら？』

いつだったかの、彼女の言葉。それに少年が返事をする。

『人間はそうしなければ生きていけない生き物だから。だからこそ人間だともいえる。一人つきりであるなら、それは人間じゃなくてただの人だ。人と人との間がないんだから』

『なら私は人でもいいわ。他人の機嫌に気を使って生活するなんて嫌だもの。なんなら、オオカミになりたいわ。一匹オオカミっていうでしょ？ 孤高の生き物って感じがしてすごく素敵』

『……分かって言ってると思うけど、オオカミは群れで狩りをするんだよ？』

すると少女は黙り込んでそっぽを向いた。知らなかったらしい。

少年がそんな少女を見て笑うと、少女は怒ったように声をかけてくる。

『人の上げ足ばかり取って楽しい？』

『お気に召すだろう？ 君の機嫌を取ろうとしていないんだから』

少年のその言葉に、少女は振り向いて『そうね……』と呟いて微笑んだ。

『また黙ってしまったわね』

少年が少女のことを回想していると、少女がからかう様に笑いながらそう話しかけてくる。

『お姉さんの気持ちがあったということは、気を引きたい男の人ができたんだな。どんな人何だ？』

『……それを私に言わせるの？ あなたはそこまで鈍感な人ではないと思っただけだ』

少年は自分を見つめてくる少女の顔から視線をずらした。それが少年を戸惑わせている最大の理由だった。

少女は誰かに自分をよく見てもらいたくなつた。だから髪飾りを付けたり、化粧をしたりしたと言っている。それを今見せているのは誰だ？ それは少年だ。だからその相手は少年に決まっている。

しかし少年にはそんな気は全然なかった。少女のことは気に入っている。だがそれは友人としてであって、恋をしていたというわけでは……。いや、そうでもないのかもしれない。確かに少年は少女に惹かれていた。だがそれは着飾ったりしないで、悲観的に世界を語る少女であって、今の少女ではない。

「ごめん。僕は君の気持に答えられない……」

「そう……」

少女の反応は薄かった。分かっていたのかもしれない。

「もう君に会うことはないと思う」

少年はそう言った。なぜか自分の中で少女に裏切られた感じがしたのだ。もう友人としても少女を見ることができる自信がない。

「そう……そうでしょうね。そうなるかもしれないと分かっていたわ」

少女は落ち着いていた。こうなることさえお見通しだったのだ。そこだけ少女らしかったかなと少年は思った。

「ならもう必要ないわね。捨てるわ」

そう言つて少女が髪飾りを取つて窓の近くに歩き出した。

（まさか窓から髪飾りを捨てるのか？）

少年はそう思ったが止められなかった。

しかし少女は、一回髪飾りにキスをして、少年に向かって投げた（何だ。捨てるというのは僕に向かって捨てるという意味だったのか）

少年がそう思つて少女を見ると、少女は窓から身を乗り出していた。

「それは形見。永遠に私はあなたの傍を離れない」

少女は窓から飛び降りた。灯台の下には、消波ブロックが敷き詰められている。

少年は慌てて、窓に駆け寄って灯台の上から下を見下ろした。少女は、消波ブロックに叩きつけられて身体が破裂し、真っ赤な花が咲いたように血を噴き出していた。

少女が捨てると言ったのは、髪飾りのことではない。少年に愛されることのない自分自身を必要ないと判断して、捨てると言ったのだ。

血だらけになっている少女を見て、少年は思わず「……綺麗だ」と呟いてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3943q/>

灯台と髪飾り

2011年8月3日03時23分発行